

第Ⅲ章 総括

今回の発掘調査では、中世、近世の遺構の調査をおこなった。

中世では、性格は不明であるが大形の落ち込みが検出された。微高地の縁辺部付近ということもあり、自然の落ち込みの可能性も想定したが、南側の壁が、平面形で見ると直線的であり、立ち上がりの角度も 50° と急角度であることから人為的に掘り込まれたものと判断した。

近世は土坑と溝状遺構が検出された。土坑 9 は、土師皿と磁器皿が一部重なるような状況で出土し、地鎮等、祭祀的な用途も想定される。ただし、磁器皿を含め何れも燈明皿として使用されたものであり、今回は検討に至らなかったが、燈明皿として使用したものを祭祀具として再利用する事例があるのか、今後類例の検討が必要である。溝状遺構は、地形の傾斜に沿う南北方向に伸びるものと、地形の傾斜に直交し東西方向に伸びるものに大別できる。地形の傾斜に沿うものの中で、溝状遺構 5、6 といった小規模なものは、人為的なものではなく、雨水の浸食により生じたものと考えられる。地形の傾斜に直交するものは、溝状遺構の床面、壁面が砂となることから区画溝としての役割を想定したが、溝状遺構 7 において粘土を用いた堰状の遺構が確認されるなど、用途が判然としない部分もある。

以上のように、当初想定された住吉 1 号墳に関連する古墳時代の遺構は検出されず、中世、近世の調査成果についても、今回の発掘調査で得られた内容は、決して多いものではない。しかしながら、試掘調査で確認された住吉 1 号墳の周溝と思われる大形の溝状遺構は、事前の調整により宅地下に保存することができた。関連する遺構が確認されなかったということは、それらが失われずに済んだという事の裏返しでもあり、そこに意義を見出すことができるのではないか。